# 「再埋め込み」としての地域づくり

## 「顔の見える専門家」としての建築家の実践

関西学院大学　松村　淳

### 1. 目的

近年ますます盛んになっている「地域づくり」であるが、本報告ではそれを「脱埋め込み化」によって奪われた「自分たちの場所」を再び取り戻していくという「再埋め込み」の営みの一つであると捉える。A.ギデンズは「再埋め込み」には「顔の見える専門家」の存在が必要不可欠であると論じたが、その「顔の見える専門家」として存在感を増しつつあるのが独立自営の建築家という専門職である。本報告では、地域づくりの現場で活動する建築家に焦点を当てて、彼らの実践について報告しつつ、「再埋め込み」としての地域づくりの現状、そして近年大きな変革期にある専門職の動向について検討していきたい。

### 2. 背景

建築家という専門職は独立自営の業態が多く、建築士資格を取得後に独立して自らの設計事務所を構えるのが一つの理想的なロールモデルとされてきた。しかし、2008 年頃をピークに設計事務所は減少し続けている。その主な要因は、新築物件の減少や大手住宅メーカー、パワービルダーの台頭である。そのような状況下、既存の建物の改築や改装を中心とした地域づくりが盛んになるにつれ、そこにコミットし、主導的な役割を果たしている独立自営の建築家の活動に注目が集まり始めている。建築界も新築物件の設計監理に代わる新たな職能として地域づくりへのコミットメントを奨励しているという状況である。

### 3. 調査方法・対象

2015 年～2017 年にかけて地域づくりに取り組む建築家(個人・グループ)に対する参与観察と聞き取り調査を実施した。参与観察を実施した現場は商店街の店舗改装、病院から住宅へのコンバージョン、そしてコミュニティセンターのリノベーション現場、民家を民泊に改装するコンバージョンの現場の四箇所である。いずれの現場もクライアントや、地域の人々を巻き込んだワークショップ形式で施工が実施された。

### 4. 結果・結論

「顔の見える専門家」として活動する建築家の多くは設計とともに施工も行うのが基本的なスタイルである。それは、施工は行わず設計を専業で行うという本来の建築家の定義から外れるものである。また聞き取り調査を行った中では、建築士資格を有していない者も少なくなかった。このように、「再埋め込み」プロセスにおける建築家のコミットメントは、専門職である建築家の職能の解体と再編を促していくことが明らかになった。また、まだ過渡期であるとはいえ、多くの者がそこで得られる報酬を十分ではないと感じており、それが、地域づくりにおいて「顔の見える専門家」としての役割を持続的に果たしていくことに対する懸念事項として存在していることも明らかになった。

### 文献

Giddens, Anthony, 1990, The Consequences of Modernity, Polity Press(=1993、松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?――モダニティの帰結』而立書房)